

# 内的モノローグ

——予備的考察・作品研究——

有 田 潤

## 解 説

内的モノローグはなかなか興味深いテーマである。本稿はいわば中間報告で、しばしば問題となる作品のうち2、3点を扱うにとどまる。研究の全体をまとめるには今後数年を要するとおもう。

Er richtete sich auf. Immer, wenn er sich aufrichtete, wurde ihm schwindlig. Ich muß zu Gundel! Der Gedanke blieb: Ich muß zu Gundel! (Noll)

彼は立ちあがった。立ちあがるときは、いつも目まいがした。グンデルのところへ行かなくては! 考えは同じだった。グンデルのところへ行かなくては!

## §1. 端 緒

これは、クラール・クルツ共著の『文体論小辞典』(Krahl-Kurz, Kleines Wörterbuch der Stilkunde, Leipzig, 1970) に内的モノローグの文例として挙げられたもので、まずこれを手掛りにしたい。以下では内的モノローグ (innerer Monolog, 英: inner monologue, 仏: monologue intérieur) を i.M. と略称する。

文例に Der Gedanke blieb: 「想念はつづく」とあるのは、下線部が口に出していわれた——äußern, aussprechen された——ものではなく、内心の呟きであることを示すがごとくである。しかし Der Gedanke blieb: は1種の導入部 (=ト書き, 言・考型動詞) であり, i.M. は必ずしも導入部を要しないから, その意味でこの文例は最適ではないかもしれない。そこでこの導入部を除去してみるとどうなるか。そうすると, これは i.M. でもありうるが, また——これだけの引用では——形式的には直接引用文と解することもできるであろう (引用符の有無は問題にならないし, 導入部のない直接引用文は多い)。このように i.M. であるか, 直接引用文であるかの判定はなかなか厄介である。また Der Gedanke blieb: を除かないで原文のまま読んでも, 下線部は直接引用文でありうる。

„...“ dachte er.

というような思考型動詞 (denken 型動詞) の導入部をもつ直接引用文はごくふつうにみられるからである。

## §2. 用語について

まず i.M. という用語について簡単にふれておこう。トレーガーの『文芸学辞典』(C.Träger, Wörterbuch der Literaturwissenschaft, Leipzig, 1986) の英語の見出し Stream of consciousness の項に

[engl., Bewußtseinsstrom; auch als erlebte Rede oder innerer Monolog bezeichnet...]

と書かれている。「意識の流れは体験話法あるいは i.M. とも称される」ということになるが、これでは 3 者の区別がはっきりしない。第 1 に“意識の流れ”は、少なくとも出発点においては心理学上の概念であった。

備考：stream of consciousness という用語はアメリカの心理学者 W. ジェイムズにはじまるといふ。本辞典の編纂者が Bewußtseinsstrom ではなく、英語を見出し語に選んだのもそういう事情によるのであろう。

これに対して、一般の理解では、体験話法は直接引用 (= 直接話法) と間接話法に対比される文法用語であり、他方 i.M. はふつう小説の技法 (Erzähltechnik) を説明するための文芸学の術語とみられる。したがって説明は 3 者の概念上の区別——心理学, 文法, 文芸学——に立ってなされるべきである。もっとも辞典の編纂者も体験話法と i.M. をまったく同一視しているわけではなく、

i.M. (直説法現在形の Ichform を使用) と体験話法 (直説法過去形の 3 人称形を使用) は意識の流れのテクニクにとって、うってつけの創作手段である、

と書いている。編纂者は、i.M. と体験話法をそれぞれ文芸学と文法の角度に分けて考える立場にないらしいが、このように両者を並列的に論ずることは問題であって、文法解説の点でもこれは十分でない。筆者の見解では、

体験話法は、形態上は直説法を用いる特殊な間接話法である (直説法を用いるのではあるが、3 人称にも過去形にも限定されない)。

そうだとすれば、文法上の 1 話法である体験話法を意識の流れと関連づけて説く必要があるのかどうか。意識の流れを取りあげるのなら i.M. に限るべきではないかとおもう。ただし i.M. と体験話法をほとんど同一視する見方については §4. で述べる。

## §3. 『ドゥーデン文法』の概念規定

『ドゥーデン文法』第 4 版 (1948) は i.M. を直接引用 (直接話法) と関連づけながら次のように規定している (§ 289)。

1 人称の代名詞 (ich, mein) は (直接話法のまま) 維持される。直説法の時称の諸形は接続法 2 または würde の形に変換され、時間・空間関係の指示は (直接話法のまま) 引きつがれる。

——ベルからの引用——

体験話法との目立った相違は、体験話法が 3 人称で、またたいていは直説法であるのに、i.M.

は1人称・接続法になることである(ただし叙述手段は多種多様に変化するから、逸脱と混合はつねに考慮されねばならない)[筆者——肝心なのはこの最後に追加されたただし書きである]。

そもそも i.M. は何であるべきか? これを断定する客観的な根拠はどこにもないのだし、唯一絶対の定義を下す権限はだれにもないのであるから、『ドゥーデン文法』の所説もそれなりに通用するはずであった。しかしこの文法書が「i.M. の主要な特徴は1人称接続法だ」としながら、直説法を用いた文例を掲げているのは、鈴木康志氏が的確に論じられたとおり(ドイツ語教育部会報, 32, S.42) 致命的な欠陥で、これは、上記の概念規定そのものの恣意性をうかがわせるに足りる。『ドゥーデン文法』の考え方を筆者なりに観察すると、次のようになる。

(1) 直接引用・間接話法・体験話法の3つの話法(Reде)——話法とは言・考の提示方法を指す用語である——を接続法(Modusの1つ)の関連で説明しているが、話法の問題をModusを中心に説くことがはたして適切かどうか。筆者はこの基本的態度にすでに批判の余地があると考え、直接引用にはModusとは関係のないさまざまな問題があり、また間接話法には接続法以外の種々の表現形式を指摘できるからである。

(2) 本文法書はi.M.を話法のうちの体験話法と対比させた。人称と時称の違いを指摘したかったのであろうが、体験話法は3人称が多いとはいえ1人称もあるし、時称の点では直説法現在形もあり過去形に限らない。他方i.M.では、実例をみれば明らかのように人称、法、時称の制約はないに等しい(後述)。

(3) i.M.において最も困難な、また考察に値するのは体験話法との比較ではなく、直接引用との区別である。

(4) i.M.の文法的特徴として、もしなにかいえるとするれば、それは、

1人称・直説法現在形に回帰しようとする傾向がある、

ということだけである。

#### §4. i.M. と体験話法の違い

筆者はi.M.と体験話法を区別し(ヴィルパートの辞典G. von Wilpert, Sachwörterbuch der Literatur, Stuttgart, 1979参照)、体験話法は文法のテーマであるReдеの問題、i.M.は文芸学の概念、とする見方を取る。

しかしi.M.と体験話法の異同については、もう少し述べておく必要があるかもしれない。先に挙げたトレーガーの辞典ではi.M.を体験話法と同様に考えているが、これは『ドイツ文学史大辞典』(Merker-Stammler, Reallexikon der deutschen Literaturgeschichte, Berlin, 1965, II. S. 418)にも見られるもので、「ジャン・パウル以来散文作品で増えつつあるi.M.は“体験話法”とも呼ばれる」としている。これは体験話法の概念を、直接引用、間接話法とならぶ1話法という単なる文法のワクを越えて、広くあるいは別方向に解する見解であろうから、筆者としてはとくに批判するつもりはない。

また文学史家 Fr. マルティーンは (『ドイツ文学史』 Deutsche Literaturgeschichte, Stuttgart, 1978, 17. Aufl. S. 483) シュニツラーが『少尉グストル』と『エルゼ嬢』で用いたテクニックを、

der episch ausdeutende Monolog, die sog. innere Rede

物語風に説明するモノローグ、いわゆる内的話法

といい、つづけて、

die innere oder „erlebte“ Rede 内的話法すなわち「体験話法」

といいかえ、一方 S. 664 では、

der innere Monolog, die „erlebte Rede“ 内的モノローグ、「体験話法」

と書いている。この著者が innere Rede 「内的話法」、内的モノローグ、体験話法のどちらを最適の用語と考えたのか分からないが、いったいこの「内的話法」は文学を論ずる場合の術語としてどの程度定着しているのだろうか。上記の『文学史大辞典』(I, S. 684) ではラジオドラマの関連で direkte Rede と並べて僅かに言及されているのみである。

次に、体験話法と i.M. の相違を具体例で考えてみよう。両者の相違は、

体験話法は主として直説法過去形・3人称で、i.M. は主として現在形・1人称で表わされる、という点だけにあるのではない。主要な違いはむしろ、

i.M. は (1) 内心の呟き、すなわち 口に出されない (aussprechen されない) 言葉 (= Gedachtes) の文字化・文章化であるのに対し、体験話法は、(1) の内心の呟きだけではなく、(2) 外部に向かって表明された発言 (= Gesagtes) を表現する手段としても用いられる、

という点にある。これを明らかにするには、(2) の場合、すなわち 体験話法で表現されている、かつ内心の呟きではありえないことの確実な、決定的な証拠を挙げればよい。関口氏『ドイツ語学講話』S. 60にある文例を引く。「話しつづけた」とあるのが決め手である。

[1] Im Wagen erzählte sie weiter. Sie freute sich herzlich, ihn zu sehen, sie hatte vorgehabt, ihn zu besuchen, sie sei eben erst ein paar Tage aus Paris zurück.

(Otto Flake: Horns Ring)

車に乗ってからも彼女は話しつづけた。貴方に会えてとても嬉しい。貴方のお宅へ伺おうとおもっていました。ほんの数日前にパリーからもどったばかりですので。

下線部が体験話法である。Sie freute sich... とあるのは、Ich freue mich herzlich, Sie zu sehen. などという定型の社交辞令を体験話法——3人称・直説法過去形——に移したものである。したがって口先でそうはいても、ほんとうは「まずいところで会ったものだ」とおもっているのかもしれない。その場合は内心の呟きは逆に

Ach, wie unangenehm! いやだ、いやだ

であったろう。

i.M. とは、(1) 内心の呟き，“aussprechen されない言葉”の文字化・文章化である、という点で諸学者の見解は一致している。またそうでなければ“内的”の語は意味をなすまい。つまり i.M. は主人公の意識を反映する、少なくともそういう形を取るテクニックなのである。これに対して体験話法の場合、文章作成者は“主人公の意識の立場”（～と感じた、等）に立つこともできるが、それは必要条件ではない。上例のように、内心の呟きでない発言も体験話法で表現されることは可能なのである。以上が両者の差異である、と聞いていいとおもう。

### § 5. 作品の歩み

われわれはここで作品名を挙げることにしたい。なにが i.M. であるか？ これは、どういう作品を i.M. の実例として考えるか、がきまらなければ議論にならない。以下はメツラーの文学辞典 (Metzler Literatur Lexikon, Stuttgart, 1984) および上記ヴィルパートの辞典の i.M. の項に挙げられたものである。

- |            |                |                               |
|------------|----------------|-------------------------------|
| 1. 1877    | Garshin, W.M.  | 4 日間 (Vier Tage)              |
| 2. 1888    | Dujardin, E.   | Les lauriers sont coupés.     |
| 3. 1889    | Conradi, H.    | Adam Mensch                   |
| 4. 1900    | Schnitzler, A. | Leutnant Gustl                |
| 5. 1922    | Joyce, J.      | Ulysses                       |
| 6. 1924    | Schnitzler, A. | Fräulein Else                 |
| 7. 1927    | Woolf, V.      | To the Lighthouse             |
| 8. 1913-27 | Proust, M.     | A la recherche du temps perdu |
| 9. 1929    | Faulkner, W.   | The Sound and the Fury        |
| 10. 1929   | Döblin, A.     | Berlin Alexanderplatz         |
| 11. 1939   | Mann, Th.      | Lotte in Weimar               |
| 12. 1945   | Broch H.       | Der Tod des Vergil            |

これらは i.M. の実例として挙げうるもののうち、おそらくほんの 1 部で、これ以外にないというわけではむろんないし、また取捨選択にも異論があるであろう。ただ筆者としてはこれを一応の代表例と考え考察をすすめたい。本稿ではこのうち 4. 『少尉グストル』と 6. 『エルゼ嬢』の 2 点を主として扱うことにする。なお W. カイザーの『文学小辞典』(Kleines Literarisches Lexikon, 4. Aufl., III, S.181) には 2, 3, 4, 5, 9 が挙げられている。

#### 4. 『少尉グストル』

この作品は、i.M. を駆使したものとしては、ドイツ文学中最古いものに属するようである。主人公である私、少尉グストルはコンサートにきている。彼はオラトリオに退屈し、かわりのある男女、父母、妹などを次々と取りとめもなくおもい浮かべる。小説は終始一貫してこの心の呟き——妄想・幻想——に終始する。“私”には死の影、すなわち死への嗜好、自殺の仄めかしがつきまとい、第 1 節で、何の関連もなしに「明後日はひょつ

として俺はもう死骸かもしれないな」と口走っているのがこの暗示のはじまりである。さて演奏会が終わり、人込みの中をクロークにたどりつく。携帯品の受け取りのことで顔見知りのパン屋と争いになり、“私”はパン屋に自分のサーベルの取っ手をつかまれ、

[ 2 ] „Herr Leutnant, wenn Sie das geringste Aufsehen machen, so zieh' ich den Säbel aus der Scheide, zerbrech' ihn und schick' die Stück' an Ihr Regimentskommando. Versteh'n Sie mich, Sie dummer Bub?“

少尉殿、ちょっとでも騒ぎたてると、サーベルを鞘からひっこ抜いてへし折って、かけらを連隊司令部へ送り届けますよ。お分かりですか、この頓馬な若造さん？

と罵られる。これがきっかけで、少尉は、奴を殺すか、決闘するか、それとも自分がピストル自殺を計るか、とおもい悩む。相手が腕つぶしの強い奴だから、やっつけることができない。といってあの“ざま”を人にみられでもしたら、地位・身分からいってそれこそもうお終いだ。“私”は一晩中ウィーンの街をさまよひ、プラターにゆき、けっきょく翌朝7時に自殺決行ときめる。最後の朝食をとるべく、行きつけのコーヒーショップにはいると、そこで「パン屋は昨夜卒中で倒れて、間もなく死にました。少尉殿がお召しあがりの丸パンはそのパン屋のですよ」と聞かされる。パン屋が死ねば、自殺の必要はない！パンは旨い。“私”は幸せになる....

そもそも死への思いも理由がはっきりしないし、行動の動機がすべて軽薄であやふやであるが、これこそ、職業軍人の哀れな虚栄、人間の愚劣さに対する作者のイロニーなのであろう。

## 6. 『エルゼ嬢』

世紀の転換期、1900年に『少尉グストル』を発表してから、約25年後にシュニッツラーは『エルゼ嬢』を書く。エルゼの父は金銭上のトラブルに巻きこまれ、3万グルデンの金が払えなければ、詐欺の廉で警察につかまる。母は、ヴァカンスでホテルに逗留中のエルゼに速達の手紙を出し、夕食のとき、知人の裕福な画商フォン・ドルスダイ氏に借金の無心をするよう懇願する。エルゼは父の窮状を救うべく、氏に“愛想”をよくするつもりになる。氏がどう応答するかを想像しながら、内心の呟きをつづける。氏は彼女に身体を求め、そのあとすぐ「あれは冗談だったと」いい直す。そのうちに母から電報がとどく。必要な金額は5万グルデンにはね上がる。彼女は想像上で、金と引換えに氏に身をゆだねて、そのあと睡眠薬ヴェロナールを呑む場合を考える。妄想は次第に激しくなり、

Bin ich tot? Bin ich scheintot? Träume ich?

あたしは死んだのか？ 仮死状態なのか？ 夢をみているのか？

これが分からなくなる。あたしはヴェロナールを呑んだらしく、気がふれたらしく、卒倒したらしく、意識を失ったらしく、パウルとツイッシ夫人の話し声が聞こえる。あたしはなにもいわない。身体がおもうように動かない。あたしは外界を遮断し、完全に主観のなかに閉じこもり、i.M. が完成する。

§ 6. 身近かな 1 例

前節でみたとおり、i.M. には前世紀以来いくつかの作品の歩みがある。しかしこのように著名なものでなくても、身近な 1 例としてアンナ・ゼーガースの『第 7 の十字架』(Das siebte Kreuz) を挙げることができよう。強制収容所から 7 人が脱走するが、そのうちの 1 人ヴァルラウは警察につかまり、警部の尋問を受ける。しかし脱走者は黙秘を明言して、以後口をつぐむ。警部の発言は通常の直接引用文(引用符がある)で書かれ、これに対してヴァルラウの内心の呟きは——沈黙を守っているのだから——i.M. の形を取る以外には文字化できない。かくて直接引用文と i.M. が交互に数ページにわたって繰り返えされ、2 種の文体が鮮やかな対照をなす。相手なき“一方的対話”といえるかもしれない。i.M. を直接引用文から識別するのはむずかしい場合もあるが、これなどは混同の恐れのない好例であろう。(地の文をボールド体に、i.M. をイタリック体にしたのは筆者の付加。訳文の右側の縦線はヴァルラウの i.M. 「」は直接引用。—は原文どおり)

[ 3 ] ... **Er fragt höflich:** „Sie heißen Ernst Wallau?“

**Wallau erwidert:** „Ich werde von jetzt an nichts mehr aussagen.“

**Darauf Overkamp:** „Sie heißen also Wallau? Ich mache Sie darauf aufmerksam, daß ich Ihr Schweigen jeweils für Bejahung nehme. Sie sind geboren in Mannheim am achten Oktober achtzehnhundertvierundneunzig.“

**Wallau schweigt. Er hat seine letzten Worte gesprochen. Wenn man einen Spiegel vor seinen toten Mund hält, dann wird kein Hauch diesen Spiegel trüben.**

**Overkamp läßt Wallau nicht aus den Augen.** . . . . .

. . . . .

„Ihr Vater hieß Franz Wallau, Ihre Mutter Elisabeth Wallau, geborene Enders.“

**Statt Antwort kommt Schweigen von den durchgebissenen Lippen.** —*Es gab einmal einen Mann, der Ernst Wallau hieß. Dieser Mann ist tot. Sie waren ja eben Zeuge seiner letzten Worte. Er hatte Eltern, die so hießen. Jetzt könnte man neben den Grabstein des Vaters den des Sohnes stellen. Wenn es wahr ist, daß Sie aus Leichen Aussagen erpressen können, ich bin toter als alle Ihre Toten.*

„Ihre Mutter wohnt in Mannheim, Mariengäßchen acht, bei ihrer Tochter Margarete Wolf, geborene Wallau. Nein, halt, wohnte —. Sie ist heute morgen in das Altersheim an der Bleiche sechs überwiesen worden. Nach der Verhaftung ihrer Tochter und ihres Schwiegersohnes wegen Fluchtbegünstigungsverdachts ist die Wohnung, Mariengäßchen acht, versiegelt worden.“

*Als ich noch am Leben war, hatte ich Mutter und Schwester. Ich hatte später einen Freund, der die Schwester heiratete. Solange ein Mann lebt, hat er allerlei Beziehungen, allerlei Anhang. Aber dieser Mann ist tot. Und was für merkwürdige Sachen auch nach meinem Tod mit all diesen Menschen dieser merkwürdigen Welt passiert sind, mich brauchen sie nicht mehr zu kümmern.*

.. 彼(警部オーファーカンフ)は丁重にたずねる。「貴君はエルンスト・ヴァルラウですね？」  
 ヴァルラウが答える。「わたしは今からはもう何も発言しません」

それに対してオーファーカンフが、「じゃ貴君はヴァルラウですね？ 貴君にご注意申しますが、黙秘はそのつどイエスとみなしますよ。貴君は1894年10月8日マンハイムで出生した」

ヴァルラウは沈黙をつづける。彼は最後の言葉を吐いたのだ。彼の死んだ口許に鏡をかざしても、鏡が息で曇ることはないだろう。

オーファーカンフはヴァルラウから目を離さない。 . . . . .

. . . . .  
 「貴君の父はフランツ・ヴァルラウ、母親はエリーザベト・ヴァルラウ、旧姓エンダース」  
 噛みしめた唇からもれるのは返答ではなく沈黙だ。

——かつてエルンスト・ヴァルラウという名の男がいた。この男は死んだ。貴方はまさしく彼の最後の発言の証人であった。彼にはそういう名の両親がいた。今や父親の墓石の隣に息子のを建てることもできよう。貴方は死体からでも発言をしほり出すことができる、ということだが、それが本当なら、私はあなたのどんな死体よりももっとずっと死体なのですよ。

「君の母はマンハイム、マリーエン小路8番、娘のマルグレーテ・ヴォルフ、旧姓ヴァルラウのところに住んでいる、いや正しくは、住んでいた。彼女は今朝ブライヒェ6番の老人ホームに移された。娘と婿が逃亡幫助の嫌疑により逮捕されたのち、マリーエン小路8番の住居は封鎖されたのだ」

私がまだ生きていた頃、母と妹がいた。私には後に友人ができ、彼は妹と結婚した。男が生きているかぎり、さまざまな引っ掛かりや縁者ができる。だがこの男は死んだ。私の死後、この奇妙な世の中のこのすべての人間に、どんな奇妙なことが起ころうと、彼らはもう私の心配をしないでいいのだ。

以上見られるとおりのi.M.は、引用符を除いた直接引用文によく似ている。

## §7. “意識の流れ”の文字化・文章化

(1) i.M.あるいは“静的モノローグ、無言のモノローグ”(stiller Monolog, stummer Monolog)とは平たくいえば“心の呟き、内心の呟き”であろう。このモノローグが演劇に由来する用語であることは専門の文芸学者が指摘している。しかし“内心の呟き”であるi.M.をどこまで“モノローグ”(mono-logos)と呼ぶことができるのか、そもそもロゴスであるといえるのか、考慮の余地があるのではないか。なぜなら、内心の呟きは、呟きとはいえ実際にはロゴスにまで達しない1種の流動状態であり、あるいは、言葉になっけていても、流動——ロゴス以前の流動——との境界が明確でない何物かであるからだ。

備考：i.M.という用語に問題があるとして、上記『文体論小辞典』は次のように述べてい



る。「i.M. は内省叙述 (Reflexionsdarstellung) の1形式であって、歴史的には舞台の独白から生まれた。内省叙述の1つであること、および直接引用との親近性を考えると、i.M. はいっそう適切には“直接的内省” (direkte Reflexion) と呼ぶべきである」

(2) こういう内面の流動状態は、前述したとおり「意識の流れ」(Bewußtseinsstrom, stream of consciousness) の用語で以前から指摘されている。その表現形態が i.M. であるが、しかし心理学者の解釈はいざしらず、文学上の問題はこの“意識の流れ”の文字化——作品化——であろう。では、ロゴスとなって、つまり文字として定着したものと意識の流れそのものとの間にはなんの懸隔も生じないのであるか？

(3) まず比較のために、直接引用の場合を考えてみよう。直接引用はしばしば「言・考の言葉どおりの再現 (wörtliche Wiedergabe)」と説明されている。しかしそういう“再現”が実際にどこまで可能であろうか？ たとえば „Aber wer sieht's denn?“ という短文が口にされたとして、このとおりに記録されれば「言葉どおりの再現」になるのかというと、そうではない。個々の語と語順は正確に写されているが、音声の微差は消えてしまった。ところが音調のいかんによって、われわれはいおうとする趣旨を逆転させることもできる。すなわち直接引用はけっして「言葉どおりの再現」ではありえず、その基本性格は、

1. 言語面のうち文字にできる部分だけを伝え、その他を切りすてる。
2. しかも言葉どおりであるかのごとく、言葉どおりのものとして、了解されている。

という点につきる。つまりこれは自他ともにそう“みなす” (als ob!) というだけの暗黙の了解にすぎない。直接引用文は、発言意図にきわめて近い新聞記事から作家による純粹の創作にいたるまで、再現 Wiedergabe の程度・内容はさまざまであろうが、いかなる場合もけっして「そのまま」ではない。

(4) 直接引用にしてしかりとすれば、“意識の流れ”の文字化・文章化がどれほど“ありのまま”でありうるか想像にかたくない。i.M. の作品にはよく夢の話が出てくるが、夢の中の映像と音声、人物像とストーリーはきわめて超現実的かつ断片的で、覚醒後に確認することの困難な、たいていは曖昧で希薄な印象を残すにすぎない。これと同様に意識の流れも、夢ほどではないにしても、「言葉どおりに再現」することなどほとんど不可能な流動なのである。それゆえ、文字化され作品化された i.M. は、批評家・文芸学者によって意識の流れと解されるにしても、実際は、作家が1語1語選びだし、意識の流れであるかのごとく綿密に構成したものにほかならないであろう。その性格は、意識の流れとの外見の類似性にあり、作家の仕事はこういう類似性の創造にあるとおもう。

### § 8. i.M. の文法的特徴

i.M. がどういう文法的特徴をもつか、ということは、何をもって i.M. とするか、できる。はじめから特定の文法的なワクを設けて、そのワクに収まるものだけを i.M. だとするならばべつだが、筆者はそういう方法ではなく、§ 5. に挙げられた実際の作品から i.M. の文法を考えたいとおもう。

(1) i.M. の具体例として挙げられた作品をありのままに観察すると、内面の吐きを文字化するさいに“文法的”制約はないに等しい、という印象を受ける。i.M. が文芸学概念であり、小説の1つの技法 (Erzähltechnik) であるとするなら、そもそも i.M. を文法問題と直接関連づけることにむりがあるのではなからうか。

(2) i.M. では基本的には Ichform かつ直説法現在形が用いられる、と説かれることが多いが、すでに述べたとおり、そこへ“回帰”しようとするだけであって、想念の自由な飛翔は、そういう文法的制約をいつでも乗り越えることができるし、またこれはきわめて理解しやすい。

(3) われわれの意識は過去・現在・未来をなんの制約もなく飛びまわり、自他に対してたえずなにかを要求し、あらぬことを欲求し、ありえぬことを仮定し、想像・幻想・妄想をたくましくする。もし i.M. が意識の流れを写し取るものだとすれば——少なくともそういう形の小説技法だとすれば——こうした意識を再現してみせるには接続法や命令法 (言語によっては条件法) も必要であって、文法的制約などあるはずはないのである。ただ意識——自我の意識、同時にそれは“言” (パロール) の主体である——が Ich・Jetzt “われ・今” という性格をもち、作者がこの意識の内部から眺める形を取るかぎり、その文章化が、たえず1人称・現在形という文法形式に回帰しようとするのは自然だ、ということにすぎない。

具体例を挙げよう。次に掲げるのは、i.M. の典型のようにいわれているマルセル・プルースト『失われた時を求めて』の第1部で、プチット・マドレーヌという名のケーキに端を発して一連の想念が展開される有名な個所である。下線部は動詞の時称と法が格別の制約を受けず、さまざまに変わりうることを示す。

[ 4 ] Il y avait déjà bien des années que, de Combray, tout ce qui n'était pas le théâtre et le drame de mon coucher, n'existait plus pour moi, quand un jour d'hiver, comme je rentrais à la maison, ma mère, voyant que j'avais froid, me proposa de me faire prendre, contre mon habitude, un peu de thé. Je refusai d'abord et, je ne sais pourquoi, me ravisai. Elle envoya chercher un de ces gâteaux courts et dodus appelés Petites Madeleines qui semblent avoir été moulés dans la valve rainurée d'une coquille de Saint-Jacques. Et bientôt, machinalement, accablé par la morne journée et la perspective d'un triste lendemain, je portai à mes lèvres une cuillerée du thé où j'avais laissé s'amollir un morceau de madeleine. Mais à l'instant même où la gorgée mêlée des miettes du gâteau toucha mon palais, je tressaillis, attentif à ce qui se passait d'extraordinaire en moi. Un plaisir délicieux m'avait envahi, isolé, sans la notion de sa cause. Il m'avait aussitôt rendu les vicissitudes de la vie indifférentes, ses désastres inoffensifs, sa brièveté illusoire, de la même façon qu'opère l'amour, en me remplissant d'une essence précieuse: ou plutôt cette essence n'étais pas en moi, elle était moi. J'avais cessé de me sentir médiocre, contingent, mortel. D'où avait pu me venir cette puissante joie? Je sentais qu'elle était liée au goût du thé et

du gâteau, mais qu'elle le dépassait infiniment, ne devait pas être de même nature. D'ou venait-elle? Que signifiait-elle ?

私の就寝劇とその舞台以外の、コンプレにかかわりのあるすべては、私にとってもう存在しなくなっていたが、あれから何年もたった冬の或る日、私ที่บ้านにもどると、ママは私が寒そうなのを見て、いつもの私の習慣に反して、お茶を少し飲んではどうかと勧めた。はじめは断ったが、なぜか私は考えを変えた。ママはプチット・マドレーヌという短いふっくらした菓子をひとつ取りよせた。それは、帆立貝の殻のような、筋のある容器で型取りされたものらしかった。それから間もなく、沈鬱な今日一日をおもいかえし、惨めな明日を予想して、押しつぶされた心持ちで、ティースプーンにマドレーヌを少々やわらかく浸しておいたのを、機械的に自分の口まで運んだ。しかしケーキのつぶの混ざったひと口が上顎にさわるやいなや、自分の心に生じてくる異常な状態に気づいて、私はゾクッと身震いした。甘美な味わいは、理由は分からないが、単独で私の心に染みこんできた。それはすぐさま人生の浮き沈みを忘れさせ、人生の災厄を軽微なものにし、生涯の短さを現実味のないものに変えてしまった。それは、私を一種のすばらしい生気で満たす恋愛の働きとそっくりであった。というよりも、この生気は私の内にあったのではない。私そのものであった。私は自分が凡庸で鬼っ子で死ぬときまっている、と感じるのをもう止めてしまった。この力強い歓喜はいったいどこから湧いてきたのだ？ それがお茶とケーキの味に繋がりがあることは感じられるが、しかしその味を遙かに超越しているし、同じ性質のものではありえなかった。この喜びはどこからくるのか？ その意味は何なのか？

次にもう1例。デーブリーンの『ベルリーン・アレクサンダーブラッツ』の1節を引いてみよう。seufzte er in sich はト書き。下線は動詞の諸形を示す。

[ 5 ] Das weiß ich, seufzte er in sich, daß ich hier rin muß und daß ich aus dem Gefängnis entlassen bin. Sie mußten mich ja entlassen, die Strafe war um, hat seine Ordnung, der Bürokrat tut seine Pflicht. Ich geh auch rin, aber ich möchte nicht, mein Gott, ich kann nicht.

分かっているんだ、と彼はひとり嘆息した。俺はこの人混みの中へは行ってゆくしかない。刑務所をおん出されたんだ。連中も俺を釈放しなくちゃならなかったのさ。刑期が終わったんだからね。そこはそれ、きまりってものがあらあね。お役人には守るべき義務があるからな。俺は人混みには行ってゆくんだが、やだねえ、畜生、できやしねえ。

ついでながら、前記カイザーの『文学小辞典』はi.M.について以下のように述べている。番号(1)(2)(3)は筆者の追加。

- (1) 体験話法とおなじく i.M. は叙事的な創作手段であって、けっきょく、体験話法を徹底したものの、体験話法が究極的に行き着いた結果である。
- (2) 語り手は、体験話法においてはまだ存在していて、単にその視点を主人公の視点と一体化するだけであるが、i.M. では語り手は完全に消失する。

(3) i.M. は文法・シンタクスの角度からみて、表現形態は直接引用のそれ（1人称・現在形）と同じである。ただし引用符で外形的に表示することをしない点異なる。

この見解については、すでに本稿で筆者の考えを述べている項目もあり、いずれ改めて取りあげたい。

### § 9. du の問題

次に du の問題を考えてみよう。上記のように i.M. の文法的特徴として、よく 1 人称単数・直説法現在形が挙げられるが、1 人称と並んで 2 人称も指摘されることがある（たとえば前記『文体論小辞典』）。i.M. にはそもそも文法的制約がないのであるから、2 人称があってもべつに不思議はないが、ともかく実例を挙げる。内心の眩きにおいて、われわれは対立する人物を呼びだし、これに向かって du で語りかけることが起こる。この du は敵視する相手の場合もあり、また反対に愛着を感じる人のことも、両者の中間も種々ありうるであろう。また du ではなく Sie の場合もあることは § 6. でみたとおりである。次例は『少尉グストル』で、自殺を数時間後に予定した主人公が妹クララをおもう個所である。

[ 6 ] ... und die Klara ... Vor der Klara hab' ich mich am meisten g'schämt ... Damals war sie verlobt ... warum ist denn nichts draus geworden? Ich hab' mich eigentlich nicht viel drum gekümmert ... Armes Hascherl, hat auch nie Glück gehabt — und jetzt verliert sie noch den einzigen Bruder ... Ja, wirst du mich nimmer seh'n, Klara — aus! Was, das hast du dir nicht gedacht, Schwesterl, wie du mich am Neujahrstag zur Bahn begleitet hast, daß du mich nie wieder seh'n wirst ?

それからクララだ... クララの前では俺はほんとに恥ずかしかった... 当時彼女は婚約していた... なぜうまくいかなかったのか? あまり気にもしなかったが... かわいそうな妹... 運がなかったのだ——そして今また、たったひとりの兄を失うわけだ... そう、二度と俺を見ることはないだろうな、クララ——終わりだ! 正月に俺を電車の所まで送ってくれたとき、二度と俺に会えないなんて、考えもしなかったろうね、お前。

また、『エルゼ嬢』では、彼女の父が監獄に入り、自分に向かって語りかける場面を想像する箇所がある。これは相手からみでの“自分の du”である。

[ 7 ] Der Papa empfängt uns im gestreiften Sträflingsanzug. Er schaut nicht böß drein, nur traurig. Er kann ja gar nicht böß dreinschauen.— Else, wenn du mir damals das Geld verschafft hättest, das wird er sich denken, aber er wird nichts sagen.

パパは縞の囚人服であたしたちを迎えるだろう。腹を立てずに、沈鬱な顔をするだけだろう。そう、けっして怖い目付きはしないだろう。—エルゼ、お前があの時金を作ってくれさえしたら、と彼は考えるだろうが、何も口には出さないだろう。

しかし du には、これとは違う“自分自身に呼びかける du”がある。なにか愚かなこと、失敗をしでかしたとき、われわれは「俺はなんて馬鹿なことを！」というが、この場合ヨ—

ロッパの意識では「お前はなんと馬鹿なことを！」のように、自己を1種の憫笑すべき相手に見立てることが多い。自意識の中で ich と du が対立するのは、自己客観化あるいは意識の分裂過剰の現われなのであろう。次の『少尉グストル』の文例では自己が ich と du に分かれている。

[ 8 ] ... es ist ja aus mit mir ... Ehre verloren, alles verloren! ... Ich hab' ja nichts anderes zu tun, als meinen Revolver zu laden und ... Gustl, Gustl, mir scheint, du glaubst noch immer nicht recht dran? Komm' nur zur Besinnung ... es gibt nichts anderes ... wenn du auch dein Gehirn zermarterst, es gibt nichts anderes! — Jetzt heißt's nur mehr, im letzten Moment sich anständig benehmen, ein Mann sein, ein Offizier sein, so daß der Oberst sagt: Er ist ein braver Kerl gewesen, wir werden ihm ein treues Andenken bewahren! ...

俺はもうだめだ... 名誉を失墜、一切をなくした! ... 自分のピストルに装填する以外にやることはないのさ... グストル, グストル, どうやらお前はまだちゃんとそのことを考えていないようだな? ... 分別をつけろ... ほかにほなにも手がなないんだ! ... お前が脳味噌をどう絞ったって、いい知恵なんぞ出るものか! ... —今できることはこれだけだ。最後の土壇場で立派に振るまい、男らしく将校らしくすることだ。すると大佐はこういうぞ。「あれはいい奴だった。われわれは彼の思い出を大切にしようじゃないか」

[ 9 ] — jetzt ist es ja doch alles eins ... Warum denn? — Ja, ich ich weiß schon: sterben muß ich, darum ist es alles eins— sterben muß ich ... Also wie? — Schau, Gustl, du bist doch extra da herunter in den Prater gegangen, mitten in der Nacht, wo dich keine Menschenseele stört— jetzt kannst du dir alles ruhig überlegen ... Das ist ja lauter Unsinn mit Amerika und quittieren, und du bist ja viel zu dumm, um was anders anzufangen — ...

今となつてはどの道同じことだ... なぜ? —俺はそのわけをとくに知ってるさ、俺は死なねばならぬ、だから、どうせ万事同じことなのだ。—俺は死なねばならぬ... じゃどうやって? —グストル, いいか、お前はわざわざブラーターまできたのだ、真夜中に、だれにも邪魔されずに—今お前は万事を落ちついて考えてみるがよい... アメリカへ行くだの退職だのと、てんでお笑いだし、お前はなにか別のことをはじめるには頓馬すぎるんだよ。

[10] Aber Gustl, sei doch aufrichtig mit dir selber: — Angst hast du — Angst, weil du's noch nie probiert hast ... Aber das hilft dir ja nichts, die Angst hat noch keinem was geholfen, jeder muß es einmal durchmachen, der eine früher, der andere später, und du kommst halt früher dran ... Viel wert bist du ja nie gewesen, so benimm dich wenigstens anständig zu guter Letzt, das verlang' ich von dir! — ...

だがグストル, 自分に正直になるんだ—お前は不安なんだね—まだためしたことがないから、不安... だが不安がったって、お前にはなんの役にも立たないよ、不安のお蔭で助かった奴はないからな、だれだってやり通さなくちゃならないんだ、人によって早い遅いの違いは

あるが、それにお前はまあ早いとこ来た方さ... お前は重んじられた試しがないんだ、だがともかく最後まで立派に振るまえ、俺がお前にそれを要求するのだ!

### § 10. Ich-Roman との違い

ついでに i.M. と Ich-Roman の相違にふれたい。上述のように i.M. を用いた作品は Ich-Roman とよく似ている。がしかし両者には創作の基本姿勢に違いがある。Ich-Roman ではすべてが“私”の観点・立場 (Ich-Erzähler) から述べられるが、その内容は、単なる意識内の流動を文章化するものではない。たとえば、

[11] Andern Tags hielt ich die Blumen während der ganzen fünfstündigen Reise in den Händen. (H. Hesse)

翌日私は5時間の旅のあいだ、花をずっと手から離さなかった。

とあれば、これは、現実<sup>に</sup>そういう行動・行為がなされた、と読者が読みとることを前提した文であって、i.M. のように、単なる連想・空想・幻想・妄想とみなされることを予想した、あるいはそう解してもらうことを期待した文意ではない。

ただし、『少尉グストル』、『エルゼ嬢』のようにほとんど i.M. の形式だけで展開される場合もあるが、i.M. として知られる作品といえども、多くはこれ以外の形式との混合によっている。

(未 完)

## Der innere Monolog

ARITA Jun

- (1) Der innere Monolog (i.M.) ist eine literaturwissenschaftliche Bezeichnung und eine Erzähltechnik.
- (2) Den i.M. behandelt man sehr oft zusammen mit (a) Bewußtseinsstrom, (b) Erlebter Rede, (c) Direkter Rede, aber beim Bewußtseinsstrom (a) handelt es sich um einen psychologischen Begriff, während (b) und (c) als grammatische Termini betrachtet werden sollten.
- (3) (a) Der Bewußtseinsstrom steht hier also im Zusammenhang mit dem i.M., insofern der Strom in Buchstaben und Sätze transformiert wird.
- (4) (b) Die erlebte Rede ist eine besondere Form der indirekten Rede, die im Indikativ (,würde‘ einbegriffen) steht und das Sagen=Denken der Figur ausdrückt, als ob es die Darstellung und Beschreibung des Erzählers wäre.
- (5) (b) Die erlebte Rede kann nicht nur den inneren Prozeß, sondern auch die nach außen geäußerten Worte zum Ausdruck bringen.
- (6) Der i.M. stellt dagegen nur den inneren Prozeß (Gedanken, Gefühle, Assoziationen usw.) dar, und hierin besteht der Sinn der Bestimmung „inner-“.
- (7) Der i.M. scheint der direkten Rede (c) ähnlich zu sein, für die aber keine grammatischen Einschränkungen zu finden sind.
- (8) Beim i.M. befindet sich der Dichter in einer Stellung, als ob er innerhalb des Bewußtseins des Protagonisten wohnte und seinen psychologischen Prozeß beschrieb, und das, was im Äußeren geschieht, wird aufgenommen, insofern es sich im Bewußtsein spiegelt oder für den Helden von Bedeutung ist.
- (9) Im Inneren des Bewußtseins, wo es in einem Sinne sprachlich viel weniger beschränkt ist als in der geäußerten Aussage, gibt es fast keine grammatischen Einschränkungen, deswegen ist der i.M. sozusagen grammatisch frei, wenn er nur den psychologischen Prozeß beschreibt. Weil das Subjekt der ,Parole‘ (Rede) aber, das mit dem Ego, dem Selbstbewußtsein, identisch ist, lediglich in der Stellung des ,Ich=Jetzt‘ stehen kann, könnte man sagen, daß der grammatische Grund des inneren Monologs in der 1. Person Singular, und zwar im Indikativ Präsens liegt.
- (10) Trotzdem macht die 1. Person Singular im Indikativ Präsens, die man häufig als ein Charakteristikum des i.M.s nennt, nur einen Ort aus, an den der Gedanke früher oder später wiederkehren muß. Der Gedanke aber kann nie dort bleiben.